

# 八戸におけるハリストス正教会の宣教と源晟

木 鎌 耕 一 郎

## 目次

はじめに

1. 幕末維新期の青森県地域
2. 明治初期におけるハリストス正教会の宣教
3. 源 晟
4. 三戸、八戸におけるハリストス正教会の宣教
5. 八戸光栄会の設立
6. 自由民権運動と政治活動
7. 1902（明治35）年の八戸光栄会の動向

結語

参考文献

## はじめに

幕末維新期の東北地方は、時の権力構造に翻弄されていた。青森県地域では津軽と南部が戊辰戦争で敵対する立場となり、互いに疲弊し、不遇を舐めた。激動の時代の中で、新しい生き方を模索した東北の士族階級の中に、各地に設けられた開港地で宣教師らに学ぶ者が現われた。彼らはキリスト教信仰を新しい精神的支柱とし、社会的な活動に携わっていった。青森県地域にもそのような人たちがいた。青森県における明治期のキリスト教については、メソジストの宣教に従事した本多庸一がよく知られている。弘前藩の士族階級であった本多は、幕末に開港地横浜で宣教師の教えに触れ、キリスト教に入信し、弘前の東奥義塾の教員と学生とともに宣教活動に取り組み、自由民権運動の担い手として青森県の政治活動にも深く関与した。同じ頃、八戸藩出身の士族にもキリスト教を新し

い精神的支柱とし、やはり自由民権運動に参加して地元政界で活躍した人物がいた。彼の名は源晟（みなもと・あきら）で、彼が入信したキリスト教は明治期に函館から宣教を開始したハリストス正教会（ロシア正教会）であった。一時期八戸には、ハリストス正教会の教会も存在した。本多庸一と源晟には、活躍の場や宗派、後世に遺した影響や知名度といった点で相違があるものの、彼らの人生の歩みに、士族階級からキリスト教に入信し、自由民権運動に携ったという共通項が見られることは、日本のキリスト教受容史を理解するうえで重要な意味を持っていると思われる。この研究ノートでは、明治期の八戸地域におけるハリストス正教会の宣教の経緯とこれに関わった人々の動向を、関連史料と先行文献をもとに整理したい。

## 1. 幕末維新期の青森県地域

1858（安政5）年、江戸幕府は、アメリカと日米修好通商条約を結び、同年にイギリス、オ

ランダ、ロシア、フランスとも同様の修好通商条約を結んだ。この結果、1859（安政6）年に神奈川（横浜）、長崎、函館、1868（慶応3）年に兵庫（神戸）、大坂、1869（明治元）年には江戸と新潟の港が、条約国に開かれ、貿易が自由化された。

修好通商条約の締結により開港地が設けられると、これらの港には、外国人居留地が設けられた。開港地には外国商人らが次々に訪れ、軍隊も駐留した。居留地の外国人の信教の自由は条約で認められていたため、外国人の司牧を担当するキリスト教の聖職者たちも各国から来日した。ただし彼らにとって、本来の目的は、やがて解禁が見込まれた日本人への布教であった。プロテスタント諸教派では、英米からの宣教師が最も多かった。カトリックはフランス人が中心で、ロシアからはハリストス正教会（ロシア正教）が上陸した。

1867（慶応3）年に維新政府が成立し、幕藩体制は崩壊した。新政府は、新しい国づくりのためにお雇い外国人を頼り、西洋文明の導入に積極的であった。しかし新政府は、江戸時代からのキリスト教の禁教政策を踏襲した。そのため居留地にやってきたキリスト教聖職者たちは、日本人への布教の機会を、少なくとも表向きには、しばらく待たねばならなかった。

東北地方は、幕末維新时期に、佐幕派も新政府派も時代の波に翻弄されていた。戊辰戦争以降の青森県地域の状況を整理しておこう。1867（慶応3）年に王政復古が成り、薩摩藩と長州藩を中心に新政府が樹立されるが、翌年には旧幕府勢力や東北諸藩との間に、戊辰戦争がはじまった。1868（明治元）年、旧幕府側につく会津藩や庄内藩の赦免を嘆願することを目的に、仙台藩や米沢藩の働きかけで、東北諸藩は奥羽列藩同盟を結んだ。同盟には、弘前藩（津軽藩）、盛岡藩（南部藩）、八戸藩も加わったが、弘前藩は離脱した。弘前藩は新政府軍の命に従い、野辺地の守りを固めていた盛岡藩、八戸藩と戦火を交えた。これは野辺地戦争と呼ばれる。弘

前藩は、戊辰戦争最後の戦いとなった箱館戦争でも新政府側に立った。こうして青森県地域は、津軽と南部が敵対する立場となったが、双方とも度重なる軍役に物資と神経を使い果たして疲弊し、不遇を舐めた点では同じであった。

1869年（明治2）年に戊辰戦争は終結し、新政府による版籍奉還、廃藩置県が断行された。このとき、めまぐるしい行政区画の変遷が見られた。青森県域には、弘前藩、黒石藩、七戸藩、八戸藩があり、加えて会津藩の転封により設置された斗南藩があった。これら諸藩は、1871（明治4）年7月の廃藩置県で、それぞれ弘前県、黒石県、七戸県、八戸県、斗南県となり、9月5日にはこれら五県と北海道の渡島地方の館県（旧館藩）とが統合され、弘前県となった。さらに二十日と経たない9月23日に、青森県と改称され、津軽郡青森町（現青森市）に県庁がおかれた。翌1872（明治5）年に、旧館藩領は北海道開拓使に移管され、現在の青森県の形ができあがった。

西洋文化に基づく近代化の波は、開港地である横浜や長崎や函館から、近隣地方にも広がり、幕末の不遇を引きずっていた東北地方にも波及していった。それとともにキリスト教もまた伝播した。幕藩体制下の価値観やライフスタイルを喪失し、幕末維新时期の不遇から体制への不満を抱えていた東北の士族階級の中には、キリスト教を日本の新しい時代を形成する精神的支柱として受容し、社会的な活動に向かう者が少なからず登場することになる。青森県では明治初期に、弘前を中心にメソジスト派の宣教が展開し、同じ頃に八戸と三戸で、ハリストス正教の宣教が始まった。やはり初期の主たる受容層は、士族階級であった。彼らは新しい時代を切り開く力を、キリスト教信仰から得ようとした。彼らのなかから、自由民権運動に参加し、青森県の政界で活躍する人材が現われることになる。

## 2. 明治初期におけるハリストス正教会の宣教

1858（安政5）年の五ヶ国との修好通商条約が締結された翌年、函館が貿易港として開かれた。ロシアは早くも開港の前年に、領事館を設けるためにゴシケーヴィチ領事一行が来日した。ロシアでは各国の領事館に司祭が同行することが定められており、函館のロシア領事館付司祭という形で、最初のハリストス正教会司祭イワン・ワシリエヴィチ・マアホフが、翌年にはワシリイ・エメリヤノヴィチが来日した。領事館と聖堂は、函館元町に現在あるハリストス正教会の土地に建てられた。

ロシア領事ゴシケーヴィチは司祭の息子で、日本人への宣教に理解があり、領事館付司祭の派遣に際し、学識が高く日本人にも外国人にもよい印象を与える人物を要請した。この要請により1861（文久元）年に派遣された人物が、ニコライ・カサートキン司祭である。

ニコライは当初から日本人への布教の志を抱き、日本語教師を雇い、日本研究に熱心に取り組んだ。ニコライに日本語を教えた者の一人に、アメリカに渡る直前の新島襄がおり、ともに『古事記』を読んだという。

開港後の函館には、各国の商人や領事関係者が来訪し、東北地方を含む日本北方地域における西洋文明の中心地となった。東北諸藩は幕末に蝦夷地警備を命じられていたため、東北と函館は精神的にも近い距離にあり、東北各地から西洋文化や医療技術を学ぶものが現れた。その中には、戊辰戦争で幕府側について敗北を舐めたものの攘夷をあきらめず再起を画策していた東北の士族階級の青年層もいた。

函館のロシア領事館付司祭という立場で函館に滞在していたニコライが、最初に洗礼を受けた日本人は、澤邊琢磨である。土佐藩出身の澤邊は、坂本竜馬の従兄弟に当たる。函館に流れて道場を開き、神明社に婿入りして宮司となった人物である。攘夷思想の持ち主だった澤

邊は、キリスト教を論駁しようとニコライを訪ねたが、逆に感化を受け、教えを受けるようになった。1868（明治元）年、ニコライは、澤邊琢磨、仙台藩出身の酒井篤礼、能登出身の浦野大蔵に教えを説き、密かに洗礼を受けた。霊名は、澤邊がパウエル、酒井がイオアン、浦野がイアコフであった。イオアン酒井とイアコフ浦野はともに医師だった。彼らが函館に来たのは、西洋の文化や医療技術を修めるためであったと考えられる。パウエル澤邊らは、受洗後、函館に新政府の新しい奉行が来ることからキリスト教に対する弾圧を予想し、函館を一時離れた。

翌1869（明治2）年、ニコライは、日本伝道会社を設立して本格的な日本宣教を実行に移す準備のために、一時帰国する。この間に澤邊らは教義を研究しつつ、布教の準備を行った。澤邊は、旧幕府軍の再興をもくろんで函館に集まっていた元仙台藩士たちに、新しい国づくりは宗教の改革にあり、それはハリストス正教しかないことを説いた。戊辰戦争で苦汁を舐めた彼らは、国を憂い、攘夷の再起を図るために函館に集まっていた<sup>1)</sup>。

1871（明治4）年にニコライが再来日すると、彼らは正教についてさらに学びを深め、石版印刷によって教理書等を作成し、伝道に備えた。この年の秋、元仙台藩士十二名が洗礼を受けた。ニコライはそのうち三名を、12月に仙台布教のために派遣した<sup>2)</sup>。彼らの活動が仙台でのハ

<sup>1)</sup> 「彼らは函館にて憂国の士として名を馳せていた澤邊琢磨を訪ねる。澤邊は国家を憂う精神こそ昔と変わることはなかったが、澤邊が日本帝国の前途を思い、彼らに説いて聞かせた持説とは「国家の革新は人心の改造によりせざる可らず。人心の改造は宗教の改革よりせざるべからず。宗教の改革はハリストス教を以てせざるべからず」というもので、一同は意外の感に打たれることとなる」『函館ハリストス正教会史 亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来150年記念』函館ハリストス正教会2011年（32頁）

<sup>2)</sup> 旧仙台藩士の十二名は、イオアン小野莊五郎、イアコフ高屋伸、ペトル笹川定吉、ペトル大立目謙吾、マトフェイ影田孫一郎、パウエル眞山温治、パウエル大條季治、アンドレイ梁川一郎、ペトル小野虎太郎、パウエル津田徳之進、ティ

リストス正教会の基盤を形成することになった。しかし禁教下の彼らの行動は、官憲から監視され、逮捕、投獄等の弾圧を受けた。

1872（明治5）年2月、ニコライは日本全国へ布教する体制を整えるため、本拠地を東京に置き、自ら赴任した。函館の布教は、日本伝道会社のために一月にロシアから着任した修道司祭アナトリーが任された。こうしてハリストス正教会の布教は函館から始まり、早い段階で仙台が伝道地となり、東京に主教座がおかれることになった。そして、函館・仙台・東京を結ぶ東北地方の経由地に、伝道が始められた。

### 3. 源 晟

パウエル澤邊が函館でハリストス正教会の布教の準備をしていた頃、八戸藩では、河原木瀧藏という人物が、東京への留学を志していた。のちに八戸のハリストス正教会を立ち上げるパウエル源晟である。河原木は、1850（嘉永3）年に八戸藩士族の家に生まれ、藩学校で文武を学び、岩泉正意から数学や洋学を教わった。岩泉正意は、盛岡藩の日進堂で大島高任から英語、物理、化学、博物、応用科学などを学び、八戸藩校で英学寮長となり、八戸での洋学の振興に努めた人物である<sup>3)</sup>。

1871（明治4）年5月、向学心の強かった河原木は、藩に東京留学の願書を届けたが、許可がおりないまま出立したため、東京の藩邸で一週間の謹慎処分となった。その後留学を許され、

東京にある八戸藩主の菩提寺である金地院の屋敷に住んだ。7月に河原木は、源晟と改名した。「源」という姓は、八戸に伝わる義経伝説に由来するとされる<sup>4)</sup>。

名を改め、志を高くした源晟であったが、その留学期間は長くは続かなかった。同年、廃藩置県が断行され、八戸藩は7月に八戸県となり、その後の合併を経て9月末に青森県となった。このため、藩費による留学生への費用給付が困難となり、八戸藩は7月23日に留学生にいったん帰郷するよう促した。さらに9月5日には、留学生に対し旅費を一人五両与えるので帰郷するよう命じている。源もこれに従うしかなかった。彼が東京でどのような学修をしたかは詳らかではない。八戸藩出身の逸見依義の私塾が、この年の9月から源も投宿した金地院でアメリカ人語学教師のクラークの雇用を外務省に申請しているが<sup>5)</sup>、帰郷の命が下った源が、その恩恵に与えることはなかったであろう。

八戸にもどった当初、源がどのように過ごしていたかは判然としない。一時期、八戸藩校の洋学部の教師に名を連ねている<sup>6)</sup>。この頃の八戸の洋学教育に関する記録として、1872（明治5）年に岩泉正意と英国人ルセーが西洋思想を教える私塾が開業したこと<sup>7)</sup>、1875（明治8）年に蛇口胤親が自宅に開いた夜学「開文学舎」で

<sup>4)</sup> 山下須美礼「八戸におけるハリストス正教会の成立と展開―受洗者名簿の記録から―」『弘前大学國史研究』124号 弘前大学2008年（29頁）

<sup>5)</sup> 明治4年9月の「県庁布令留」に「弘前縣貫属元八戸縣士族 逸見思無邪」が「今度米利賢人クラーク氏雇入洋語学所相開候定約」とあり、11月には「青森県貫属 逸見依義」が同様に願書を外務省に提出したことが記録されている。八戸教育史編さん委員会『八戸市教育史（上）』八戸市教育委員会 昭和49年（103-105頁）を参照。

<sup>6)</sup> 上掲『八戸市教育史（上）』「明治四年一月から十二月まで八戸藩学校で教育を受けた小島穂積」による情報として、三人の教員のうちの一人に「源晟 洋学部の先生」とある（128頁）。

<sup>7)</sup> 上掲『八戸市教育史（上）』に掲載された「私塾、寺子屋開設状況」の私塾の表には、明治5年に開業した西洋思想を教える私塾に、岩泉正意とルセーの名があり、塾生数は男二とある（154頁）。

ト小松韜藏、パウエル岡村伊賀藏である。パウエル澤邊が代父となった。このうち仙台での伝道に派遣されたのは、イオアン小野、ペトル笹川、イアコフ高屋の三名である。上掲『函館ハリストス正教会史 亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来150年記念』（37頁）

<sup>3)</sup> 岩泉正意は当時、八戸における洋学普及の第一人者であった。ジョン・スチュアート・ミルの「代議政体論」や「ミルトン論」を翻訳している。源晟の他、ハリストス正教会に入信する奈須川光宝、関春茂も岩泉から洋学を学んでいる。八戸市史編纂委員会『新編八戸市史通史編 III 近現代』八戸市2014年（48-49頁、76頁）



も、岩泉正意とルセーが教えていることがわかって<sup>8)</sup>。八戸随一の洋学者であった岩泉の私塾が、おそらく蛇口の開文学舎に発展したものと考えられる。源は岩泉の教え子であり、志なかばで帰郷した彼がこの頃師匠のところに入入りしていたことは確かであろう<sup>9)</sup>。

代言人として活躍したという記録もある。開文学舎が開かれた同年、源は青森県に対し建議書を提出している。その中には「妓税ヲ増スノ儀」として、芸妓業に増税を課して廃業を促進し、その税収を救貧のために活用する訴えが見られる<sup>10)</sup>。源の社会問題への視座や正義感をうかがい知ることが出来る。

#### 4. 三戸、八戸におけるハリストス正教会の宣教

ハリストス正教会の布教は、上述のようにパウエル澤邊ら最初の受洗者と旧仙台藩士たちが、函館と仙台で伝道したことに始まる。仙台ではイオアン小野の自宅に講義所が設けられ、

パウエル澤邊も加わり、伝道が積極的に行われた。函館では、修道司祭アナトリイのもとで伝教者の養成が始められ、市内数か所に講義所が置かれ、イオアン酒井とパウエル津田が中心となって伝道が行われた。

しかし当時、政府はキリシタン禁制政策を保持しており、官憲は戊辰戦争で旧幕府側についた旧仙台藩士の動向を危険視し、警戒していた。1872（明治5）年2月に仙台でパウエル澤邊らが投獄されたのを皮切りに、入信希望者らを含め計一〇七名が投獄され取調べを受けた。函館でも3月にイオアン酒井、パウエル津田らを含む九名が投獄された。ニコライをはじめ、キリスト教諸派はこれに抗議した。この頃欧米を訪れていた岩倉具視使節団も、一連のハリストス正教会の信者捕縛を非難され外交問題に発展したため、捕縛者は6月までに釈放された<sup>11)</sup>。こうした受難を経て、伝道はいっそう活発化していくことになる。

青森県でのハリストス正教会の伝道は、上記の伝道者が函館仙台間を行き来する中で行われた。青森県において伝道がいつから行われたかは定かではないが<sup>12)</sup>、1873（明治6）年に、三戸や八戸で伝教者が訪れていることは次のことから確かである。

すなわち、1873（明治6）年12月13日付で、第十七中学区取締の北村礼次郎から五戸市庁吉田茂宛ての報告に、三戸で「東京ニコライ門人」

<sup>8)</sup> 上掲『八戸市教育史（上）』（235-236頁）及び八戸近代史研究会『きたおう人物伝 近代化への足跡』デーリー東北新聞社平成7年（21頁）を参照。ルセーは、三沢の広沢牧場で西洋式牧畜を指導した英国人マキノンの通訳であった。

<sup>9)</sup> 岩泉はキリスト教に対する理解者でもあった。「八戸地方の布教はスムーズではなく、三戸の中学区取締の北村礼次郎は七年三月「ヤソ警戒二係ル建言」を出し、県令代理の太田広城は厳しい弾圧を加えている。ところが洋学に造詣の深い岩泉正意が九年五月に北村から代わると弾圧を解き、十月には堤町に八戸初の教会「陸奥国八戸光栄会」が設立された。」上掲『きたおう人物伝 近代化への足跡』（34-35頁）

<sup>10)</sup> 源晟の建議書は、青森県史編さん近現代部会編『青森県史資料編近現代Ⅰ』青森県2002年（133頁）に掲載されている。建議の内容は「副戸長壱名及組頭ヲ廃スルノ議」「五戸支庁ヲ八戸へ転スルノ議」「妓税ヲ増スノ儀」の三点であり、明治8年2月15日付で県参事に宛てられている。山下須美礼氏は、建議書のなかに源が二三年宮城県や岩手県を回っていたことが記されていることから、この時期にハリストス正教会の教えに触れた可能性を示唆している（山下須美礼上掲論文30頁）。

<sup>11)</sup> 函館と仙台で行われたハリストス正教会信者の官憲による捕縛と釈放の経緯について、政府と地方行政によるキリスト教禁制の認識との関わりから考察した論文に、鈴江英一「函館・仙台洋教事件における“寛典の処置”禁教政策への影響」『史学』第69巻第2号 慶應義塾大学2000年（169-194頁）がある。

<sup>12)</sup> 八戸での宣教開始の年については、上掲『新編八戸市史通史編Ⅲ 近現代』（27頁）、八戸社会経済史研究会編『概説八戸の歴史下巻1』北方春秋社昭和37年（89頁）等、おおむね1873（明治6）年である点で一致しているが、八戸社会経済史研究会編『写真で見る八戸の歴史 明治・大正の試練』北方春秋社1970年（59頁）では「慶応四年（一八六八）四月から」とされるなど、異説も見られる。

の仙台士族「大嶋」なる者が住民に伝道したことから、北村が感化された住民を「説諭」し「反正」の証書を提出させたことが記されている。そこには、証書を提出した者九人、「入社」（入信）したので証書を提出しなかった三名の名が記されている<sup>13)</sup>。

また12月16日付の報告では、「酒井某」を含む「耶蘇教箱館教会より四人相廻り候」とし、伝教者四人が八戸、七戸、五戸で活動しているという情報を追加している<sup>14)</sup>。これらの動きを受けて、同年12月24日付で青森県権参事那須均から岩倉具視に宛てた報告では、三戸郡において宮城県出身の「大島丈輔」というニコライの門人がやってきて、キリスト教について講演し、数十人がこれを聞き、内数人が入信したことが伝えられている<sup>15)</sup>。旧仙台藩士と同様、旧南部藩士や旧斗南藩士も戊辰戦争で新政府と対立したことから、官憲はこれら士族らの目立った動きを警戒していたのである。

なお『日本正教傳誌卷之壹』には、イオアン酒井が、1873（明治6）年の「十二月を以て、八戸地方の傳道を命ぜられ」たこと、翌年1月まで「八戸・福岡・三戸間に在りて、福音を傳え」ていることが記されている<sup>16)</sup>。

これより早い記録として、三戸の川村正吉が「明治三年八月二十七日アナトレイ司祭によって洗礼をうけ」<sup>17)</sup> たとの情報があるが、アナトレイが来日したのは1872（明治5）年であるから矛盾する。「明治三年」はニコライが一時帰国中であり、旧仙台藩士らの受洗より前に司祭不在のなか三戸で受洗者があったとは考えにくい。

以上のことから、青森県での伝道の始まりの時期は特定できないまでも、1873年（明治6）年にまず三戸で伝教者の往来が盛んになり入信希望者が現れ、八戸にも伝道の裾野が広がっていったと考えるのが妥当と思われる。八戸の源晟もまた、この頃にハリストス正教の教えに触れたのであろう。

## 5. 八戸光栄会の設立

1876（明治9）年7月に行われたハリストス正教会の公会の記録である『公会議事録』には、「三戸教会ハ宜キ景況ナリ、又八戸伴美丸ト云う者甚タ尽力スルノ様子ニテ、已ニテ教会ヲ立テントセリ」<sup>18)</sup> とあり、善い伝教者を派遣すれば盛んになるだろうと報告されている。この頃、

にあたる川股吉治が迎えに行った際に、イオアン酒井が「八戸・福岡・三戸」で伝道していたことが記されている。なお、この甥は後に「アウラム」の霊名で受洗したという。

<sup>17)</sup> 佐藤和夫「明治初期ギリシャ正教伝道史における士族信徒の政治活動について：三戸聖母守護会記録の一断面」『弘前大学國史』62・63号1975年（9-21頁）における、盛岡ハリストス教会所蔵の『三戸聖母守護会記録』の調査に基づいた川村正吉に関する記述（10頁）である。三戸町史編集委員会編『三戸町史中巻』三戸町平成9年にも、同記録をもとに「明治三年、仙台藩士大島丈助なる信徒が函館に赴く途中、風雨悪天候のため、三戸に二泊したのを機会に川村正吉は入信し、ハリストス正教信徒となり」と記されている。「大島丈助」は、上記の明治6年12月に三戸で伝道した人物「大嶋」と重なるため、川村正吉の受洗の年は、正しくは明治6年と考えるのが妥当と思われる。

<sup>18)</sup> 八戸市史編集委員会編『新編八戸市史近現代資料編Ⅰ』八戸市2007年（275頁）文中の「伴美丸」は誤記で、「伴義丸」のことであろう。

<sup>13)</sup> 「社中反正証差出シ候者 三戸佐藤連之助 連之助 長男 佐藤良平 岩手県士族三戸寄留 川村甚之丞 三戸 諏訪内源司 同 近田蘭平 同 松尾五兵衛 同 斗南 小野和助 三戸 佐藤九郎八メ九人 函館教会へ入社証書不出者 三戸 宮喜代太 同 江刺家其太 甚之丞長男 川村定次郎」上掲『青森県史資料編近現代Ⅰ』（735-736頁）。

<sup>14)</sup> 同上（736頁）。続く箇所「東京ニコライより旧南部地方へ函館より伝道師十名余も相廻り可申旨、函館教会アナトリエへ申来り候」とし、ハリストス正教会の動向を注視している。

<sup>15)</sup> 「当県管下三戸郡村々におゐて耶蘇教講談致候者有之趣相聞候ニ付取糾候処、魯人ニコライ門人之由にて、宮城県貴属士族大島丈輔なる者講筵を開き勧誘致候より、己ニ其筵ニ入ルもの數十人、其門に入ル者も亦数人ニ至り申候」（同上735頁）

<sup>16)</sup> 石川喜三郎編『日本正教傳道誌』卷之壹 正教會編輯局発行1901年（201頁）イオアン酒井は、先に投獄釈放された後、実家である金成の川股家預かりとなったが、1874年1月に再び水沢県庁から召喚があった。そこでイオアン酒井の甥

三戸には既に教会があり、八戸では教会を設立する動きがあったことがわかる。そして同年10月7日、八戸の堤町に「陸奥国八戸光栄会」が設立された。この時、八戸を訪れていたのはパウエル澤邊である。彼は、前年7月に、日本人初のハリストス正教会の司祭に叙階されており、洗礼を施す資格者となっていた。上記の公会での報告に応じて、早速司祭が派遣されたものと思われる。

光栄会設立にあたり、パウエル澤邊が洗礼を授けたのは二十六人であった。その大部分は士族である。受洗者名簿の筆頭には、源晟の名がある。霊名はパウエルで、二十六歳であった。二番目には、先の引用で八戸の教会設立に尽力していたという伴義丸の名がある。霊名はペトルで、源より二歳年下の二十四歳であった。

教会設立後、パウエル源は上京し、ニコライのもとで学び、副伝教者となった<sup>19)</sup>。1877(明治10)年7月より、伝教者サワ山崎とともに八戸光栄会に派遣された<sup>20)</sup>。この年の『公会議事録』には、3月に受洗者が十名あったことに加え、「啓蒙ヲ受ル者」、すなわち洗礼の準備者が一名、教会に集まる者が二十名余りで、そのうち十名ほどが洗礼を希望していることなどが報告されている<sup>21)</sup>。なお、9月にパウエル源の母ヤヨが亡くなったが、彼女も亡くなる前に受洗した。

パウエル源は、翌年4月に千葉県の新井で伝道を行い、7月には秋田に派遣されている。千葉でも秋田でも、プロテスタントの伝道者と鉢合わせすることがあり、また神道や警察からの妨害も加わり、思うように成果を上げることはできなかったようである。その後、1879(明治

12)年には、岩手県の大槌に派遣された。翌1880(明治13)年、再び八戸の伝教者となった。

八戸光栄会による地域での伝道は順調とはいえなかった。1879(明治12)年の公会の記録には、イヲアン石橋という信徒が、神道を奉じる実家から「田地ヲ収没サン家ヲ逐ヒ出サントス」という受難を負ったことが記されている。また「人心ハ金財ニアリテ、天国ニアルモノ甚ダ少ナシ」と、世情を憂う報告も見られる。1881(明治14)年には、パウエル源が「正式ヲ以テ死者ヲ埋葬シタル科」によって「贖罪金二円五拾銭」を課せられたとされる。この年の八戸の教勢は信者「五十五名内男三十六名女十九名」で、主日に教会に集う人数は二十四、五名とされる<sup>22)</sup>。

八戸光栄会設立のために尽力したというペトル伴義丸について、一言しておこう。彼の出自や教会設立後の動向については判然としないが、長く伝教者として働いていたことが次のことからわかる。すなわち、1902(明治35)年と1903(明治36)年の『公会議事録』において、公会に出席した伝教者名簿に名を連ねており、兩年とも宮城県の新井の教会付の伝教者として派遣されていることが記録されている<sup>23)</sup>。パウエル源が1886(明治19)年に政界入りした際に伝教者を辞しているのに対し、ペトル伴は伝教者に徹したらしく、少なくとも上記の公会まで活躍したことが知られる。

## 6. 自由民権運動と政治活動

さて、弘前の東奥義塾出身者と同じように、八戸でハリストス正教に入信した士族出身者た

<sup>19)</sup> ニコライのもとで「認められ教会付属の小学校監督も任せられた」という。上掲『きたおうう人物伝 近代化への足跡』(47頁)

<sup>20)</sup> 以下、次の段落までの記述は、ハリストス正教会の雑誌『教会報知』等の検証によりパウエル源の動向を詳細に跡づけた山下須美礼の上掲論文(30-39頁)に、ほぼ負うている。

<sup>21)</sup> 上掲『新編八戸市史近代資料編I』(276頁)

<sup>22)</sup> 同上(278頁)

<sup>23)</sup> 石川喜三郎編『日本正教会公会議事録』正教会事務局(明治35年)及び同編『大日本正教会神品公会議事録』(明治36年)が国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」で公開されている。明治35年の新井教会の教勢は、「信者総員四〇一、現在員二〇四」とあり規模の大きい教会であることがわかる。

ちのなかから、政治の世界で活躍する複数の人材が生まれた。1880(明治13)年、八戸では「暢伸社」という自由党系の結社が立ち上げられた。弘前で本多庸一らによる民権運動の組織「共同会」が設立されたのと同じ年である。暢伸会の中心人物は、後に県議員、衆議院議員、鮫村長、八戸町長を務めることになる奈須川光宝である。会のメンバーは、上述の蛇口が開いた開文学舎の出身者で、いずれも岩泉正意と交流があった。必然的に八戸光栄会の信者も多く、パウエル源の他、マルク関春茂、パウエル白井毅一、アンドレイ井河天寿などがメンバーに入っている。

暢伸会のメンバーが最初に取り組んだ政治運動は「産馬騒擾事件」であった。南部地方はもともと馬産地であったが、この頃、青森県は馬の市場を統制し、馬産者に対する増税により県の税収増を図ったため、馬産農家の不満が鬱積していた。奈須川やパウエル源ら暢伸会のメンバーは農家の反対運動に呼応して、民間で市場を運営し、馬産農家の負担軽減を実現するための運動の中心に立ち、最終的に裁判で勝利した。

政治的手腕に信望を得たパウエル源は、1886(明治19)年に青森県議会議員に当選した。政界入りにともない、彼は翌年の公会でハリストス正教の伝教者を辞した。この時ニコライは、激励の意味でパウエル源にイコンを贈った<sup>24)</sup>。その後、パウエル源は自由党に入党し、奈須川、マルク関ら暢伸会のメンバーと「八戸土曜会」という自由党系の政治結社を組み、影響力をふるった。1891(明治24)年に県議会議長に就任し、1894(明治27)年には衆議院議員となった。

八戸光栄会のメンバーで暢伸会に加わった者のうち、パウエル源の他に政界入りをした人物として、マルク関がいる。彼は青森師範学校八戸分校の最初の卒業生として小学校教員となっ

たが、県議員に当選後、通算二十四年間議員を務めた他、代議士も一期就任した。晩年は湊村長、八戸町長を務めている<sup>25)</sup>。またパウエル白井毅一は、産馬組合長、八戸町助役を務めた<sup>26)</sup>。

教会のメンバーが政界で活躍する一方で、八戸光栄会の教勢は落ち込んでいく。山下須美礼氏による受洗者名簿の調査によると、最も受洗者が多かった年は教会が設立された1876(明治9)年の二十六人であり、1901(明治34)年まで血縁者を中心に受洗者が見られるが、右肩下がりである。1902(明治35)年から1911(明治44)年まで受洗者の記録はなく、1912年(明治45)年から1919(大正8)年まで、断続的に少数の血縁者の受洗者が見られる。山下氏の分析によると、八戸光栄会の信徒は、おおむね教会設立時に受洗した者とその血縁者から構成されており、そこからの新たな広がりが見られなかった<sup>27)</sup>。

教勢の伸び悩みは、明治30年代に入り日露戦争の足音が近づき、ハリストス正教への世間の目が厳しくなったことも影響しているであろう<sup>28)</sup>。信徒の政治活動にも影が忍び寄り、1898(明治31)年にパウエル源は、衆院選で奈須川に敗れ、政界を離れた。

<sup>25)</sup> 関春茂については上掲『きたおうう人物伝 近代化への足跡』(88-89頁)を参照。人柄について「精練、潔白人柄は万人の尊敬するところであり、頼み事の礼はいっさい受け取らず、いつも「神のためにやっている」と言った」と記されている。

<sup>26)</sup> 上掲『概説八戸の歴史下巻1』(91頁)

<sup>27)</sup> 山下須美礼 上掲論文 (33-36頁)

<sup>28)</sup> 上掲『写真で見る八戸の歴史 明治・大正の試練』には、「八戸ギリシヤ正教会の指導者源晟は群衆から襲われ「露探」とのしられた。信徒の生命の危険さえ感じた八戸正教会は、三十六年の末に遂に解散を宣言した」(112-113頁)とあるが、上述のように、その後もわずかながら受洗者がいることから、「解散」の意味するところは不明である。

<sup>24)</sup> ニコライから送られたというイコンの写真が、上掲『写真で見る八戸の歴史 明治・大正の試練』(53頁)に掲載されている。



## 7. 1902（明治35）年の八戸光栄会の動向

1902（明治35）年の『公会議事録』に、当時の八戸光栄会の状況をうかがうことができる報告が見られる。この年の公会で、八戸地区の担当者であるボリス山村司祭から「パウエル源外七名」から提出された「八戸教會提出請願『目時傳教者再任派遣の件』」が読み上げられている。それによると、八戸光栄会では「久しく不振の状態」で新しい信者が出ず、従来の信者も祈祷に来ることが稀になったが、「目時傳教者」が赴任してから「面目を一新」したという。すなわち目時傳教者は、着任後「青年會を組織し信徒を誘引」し、そこでは異教徒も加わって教えを聞くようになり、洗礼希望者も現われた。ところが、目時傳教者が転任せざるをえない事情が生じた。その理由は、蟹田に赴任していた「細川傳教者」が病気の妻を連れて郷里の八戸に戻ってきたからだという。一つの地区に二人の傳教者は必要ないので、目時傳教者が代わりに蟹田に赴任したわけである。

しかし請願によると、細川傳教者は、両親が病に伏しており、遂には妻子も失ってしまった。細川傳教者は、両親の看護のため青年会の世話どころか伝道することもままならない状態である。そのため教会に来る者がなくなってしまった。そこで目時傳教者を再び八戸に派遣してほしいという請願となった。

ボリス山村司祭は「予も此の間八戸に参つたが、執事等とも相談し、同教會の先輩たるパウエル源、マルク關などの意見をも聞きたり」として、実際に八戸で実情を調査している。その上で、目時傳教者を失えば「折角組織したる青年會もそれ切りになり、進歩に赴き來りし會勢も頓挫するに至る」ので、是非請願を採用してほしい旨を訴えている<sup>29)</sup>。

この報告により、当初の勢いを失った八戸光栄会が、なおも将来の伝道に希望を抱いていた

様子と、その中で政治活動から身を引いたパウエル源が、教勢の回復のために心を砕いていた姿を垣間見ることができる。結局、この時の公会の審議では、八戸の教会への派遣者は「副傳教者イグナティ目時 傳教生 アレキサンドル細川」の二名で決着し、パウエル源らの請願は聞き入れられた<sup>30)</sup>。

## 結 語

幕末から明治初期のハリストス正教会の特徴は、プロテスタント諸派やカトリックが長崎や横浜から宣教を開始したのに対し、函館から仙台、さらに東京へと南下していったことが挙げられる。また、当初の受洗者は、旧幕府側についた不遇の士族階級の青年たちであった。彼ら中から司祭や傳教者が生まれ、布教の担い手となった。ハリストス正教会では、他のキリスト教諸派と異なり、外国人宣教師の数は圧倒的に少ない。ニコライは「われわれの教会は日本人たちの手によって築かれたのです。日本にわれわれ宣教師は二人以上いたことはない。われわれのところでは聖職者と伝道者はすべて日本人です」と常々語っていたという<sup>31)</sup>。ニコライと

<sup>30)</sup> 同上（149頁）。なおこの公会で、盛岡教会もまた目時傳教者の派遣を請願している。「ティト相澤傳教者」から「兄弟等は目時傳教者を愛し居るを以て、同氏を遣されたし。目時氏は八戸よりも請願し居らるゝも、盛岡の布教は八戸に比すれば、大いに盡力せざるべからず、教會全体の希望なれば目時氏を遣はされたし」との請願が発せられている（同上105-106頁）。八戸と盛岡で目時傳教者を取り合う形になっていたことがわかる。

<sup>31)</sup> 中村健之助『宣教師ニコライと明治日本』岩波書店1996年（91頁）。同書によればニコライが目指したのは日本人による自立した教会であり、ロシアによって監督される「支店」ではなかった。「…宣教の勢いにおいて他派にひけをとらなかつたのは、そして日露戦争においてロシア人はニコライ以外だれもいなくなったのに活動を維持しえたのは、最初期から日本人が伝道を担い、司祭もまた日本人から選んだからなのである。日本正教会はニコライと日本人の作った教会であった」（同書95頁）

<sup>29)</sup> 上掲『日本正教会公会議事録』（99-101頁）

いうカリスマ的な存在のもとで、日本人司祭、伝教者たちの組織的で活発な伝道活動が行われたことは、ハリストス正教会の布教活動の特筆すべき特徴である。

八戸ではパウエル源晟やペトル伴義丸が中心となって八戸光栄会が設立され、源自身も伝教者として各地に赴いた。ペトル伴義丸のように長く伝教に徹した人物もいたが、やがて八戸光栄会関係者からは県や市町村での政治活動に携わる者が輩出された。彼らの人生の歩みに着目すると、士族階級—キリスト教入信—自由民権運動—政治活動という流れがあり、弘前を中心にメソジストの宣教に携わった本多庸一らとの共通点が見られる。しかし東奥義塾という学校を拠点に宣教や自由民権運動に携わった本多らと異なり、当初の受洗者が血縁関係をもとにしていた八戸光栄会の教勢は、広がりを見せることなく衰退した。1902（明治35）年の『公会議事録』には、パウエル源が教勢の回復のために尽力したことが垣間見える。しかし明治初期とは状況は変わり、その頃の日本はキリスト教宣教に厳しい目が向けられていた。1889（明治22）年に大日本帝国憲法が公布され、国家神道政策が加速したこと、1891（明治24）年の内村鑑三による「不敬事件」の影響で、日本人の中にキリスト教排撃の気運が生まれたこと<sup>32)</sup>、1899（明治32）年に学校の課程内で宗教教育を禁止する文部省訓令第十二号が公布され、多くのキリスト教系の学校が対応に迫られたことなどを挙げることができよう<sup>33)</sup>。とりわけ明治30年代には、日露戦争の影響で、ロシアからのキリスト教であるハリストス正教の立場は危うかった。

1911（明治44）年、ハリストス正教会は「ニコライ大主教渡来五十年期祝典」を祝ったが、

その翌年、すなわち明治最後の年の2月、ニコライは東京で七十五年の生涯を閉じた。さらにその翌年の6月、日本人最初のハリストス正教会の信徒で、八戸でパウエル源ら二十六人に洗礼を授けたパウエル澤邊琢磨司祭が、七十八歳で亡くなった。

パウエル源は、晩年に八戸町立徒弟学校長、町立図書館長などに就き、1918（大正7）年に、六十八歳で亡くなった。河原木家の菩提寺である八戸市の曹洞宗廣澤寺に、今も彼の墓がある。

### 参考文献

- 『青森県日記百年史』東奥日報社 昭和53年  
 青森県史編さん近現代部会編『青森県史資料編 近現代Ⅰ』青森県 2002年  
 青山学院編『本多庸一』三五堂 昭和43年  
 青山玄「幕末明治のカトリック布教の性格」『カトリック研究』35号 上智大学神学会 昭和54年  
 石川喜三郎編『日本正教傳道誌』卷之壹 正教會編輯局発行 1901年  
 石川喜三郎編『日本正教会公会議事録』正教會事務所 明治35年  
 石川喜三郎編『大日本正教会神品公会議事録』明治36年  
 伊藤徳一編『東奥日報と明治時代』東奥日報社 昭和33年  
 牛丸康夫『日本正教史』宗教法人日本ハリストス正教会教団府主教庁監修発行 昭和53年  
 内海健寿「明治初期 青森県弘前メソジストの社会活動の興隆と試練」『ウェスレー・メソジスト研究』第二号 日本ウェスレー・メソジスト学会 教文館 2001年  
 小川原正道「本多庸一における「政治」」『法學研究』第85巻8号 慶應義塾大学法学会 2012年  
 小川原正道『日本の戦争と宗教 1899-1945』講談社 2014年  
 小川原正道『明治の政治家と信仰—クリスチャン民権家の肖像』吉川弘文館 2013年  
 川崎晴朗『築地外国人居留地』雄松堂 2002年

<sup>32)</sup> 高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館 2003年（152-154頁）を参照。

<sup>33)</sup> キリスト教史学会編『宣教師と日本人—明治キリスト教史における受容と変容』教文館 2012年（126-128頁）を参照。

- 氣賀健生著 青山学院『本田庸一』編集委員会編『本田庸一—信仰と生涯』教文館 2012 年
- 北原かな子『洋学受容と地方の近代—津軽東奥義塾を中心に—』岩田書院 2002 年
- 北原かな子『津軽の近代と外国人教師』岩田書院 2013 年
- キリスト教史学会編『宣教師と日本人——明治キリスト教史における受容と変容』教文館 2012 年
- 佐藤和夫「近代青森県キリスト教史の研究（その一）」『弘前大学國史研究』55 号 弘前大学 1970 年
- 佐藤和夫「近代青森県キリスト教史の研究（その二）」『弘前大学國史研究』56 号 弘前大学 1970 年
- 佐藤和夫「明治初期ギリシャ正教伝道史における士族信徒の政治活動について：三戸聖母守護会記録の一断面」『弘前大学國史研究』62・63 号 弘前大学 1975 年
- 三戸町史編集委員会編『三戸町史中巻』三戸町 平成 9 年
- 鈴江英一「函館・仙台洋教事件における“寛典の処置”禁教政策への影響」『史学』69-2 号 慶應義塾大学 2000 年
- 第 5 回日本伝道会議プロテスタント宣教 150 年プロジェクト編『日本開国とプロテスタント宣教 150 年』いのちのことば社 2009 年
- 高橋昌郎『日本プロテスタント史の諸相』聖学院大学出版会 1995 年
- 高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館 2003 年
- 中村健之助『宣教師ニコライと明治日本』岩波書店 1996 年
- 日本メソジスト弘前教會『弘前教會五拾年略史』大正 14 年
- 『函館ハリストス正教会史 亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来 150 年記念』函館ハリストス正教会 2011 年
- 八戸近代史研究会『きたおうう人物伝 近代化への足跡』デーリー東北新聞社 平成 7 年
- 八戸教育史編纂委員会『八戸市教育史（上）』八戸市教育委員会 昭和 49 年
- 八戸社会経済史研究会編『概説八戸の歴史下巻 1』北方春秋社 昭和 37 年
- 八戸社会経済史研究会編『写真で見る八戸の歴史 明治・大正の試練』北方春秋社 1970 年
- 八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史近現代 資料編 I』八戸市 2007 年
- 八戸市史編纂委員会編『新編八戸市史通史編 III 近現代』八戸市 2014 年
- 藤村重實編『八戸地区カトリック宣教百周年記念誌』八戸地区カトリック宣教百周年記念誌実行委員会発行 平成 9 年
- 松井千恵「明治時代におけるキリスト教」『仙台白百合女子大学紀要』1 号 1970 年
- 山下須美礼「八戸におけるハリストス正教会の成立と展開—受洗者名簿の記録から—」『弘前大学國史研究』124 号 弘前大学 2008 年
- 山下須美礼「明治初期ハリストス正教会における仙台藩士族の西日本伝教」『歴史人類』40 号 筑波大学大学院人文社会科学研究科歴史・人類学専攻 2012 年